

## 鹿児島県大隅諸島屋久島におけるクワガタムシ科Lucanidae

渡邊卓実\*

### The Lucanidae Stag beetle in Yakushima Island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, Japan

WATANABE Takumi

Abstract : There are nine species of Lucanidae Stag beetle in Yakushima Island, Kagoshima south of Japan. I had conducted research five years to ascertain whether nine species of Lucanidae Stag beetle still inhabit the island from April 2018 to March 2023. I confirmed that all nine species are still inhabits.

キーワード：屋久島，クワガタムシ科

### はじめに

鹿児島県大隅諸島に位置する屋久島は世界自然遺産に登録される程の自然を誇り、九州最高峰の山を有し、植物においては垂直分布（図1）など特異的な植生や地形が見られる。動物は生息環境や生態系の多様性が見られ、数多くの生物種が生息する。島の9割が山岳地帯であり、屋久島の森のほとんどが国立公園や国有林に指定され、高標高帯は登山道以外人が入る事は珍しい。そのため、調査を行った範囲は林野庁の入林許可をいただいた林道や支線を主に調査した。昨今、外国産の昆虫飼育ブームもあり、全国で放虫が見つかるニュースを聞く。2021年には世界自然遺産に登録された奄美大島にて、外国産のカブトムシの死骸が見つかった。屋久島も例外ではなく、尾之間集落の住民から「数年前にヘラクレスオオカブトを見つけた」という情報を得た。外来種だけでなく、乱獲者による国内在来種の違法採取やモラルが欠けた行動が屋久島で目立つようになり、観光地且つ採取禁止区域から鉈などの刃物により、傷つけられた木々が多く見つかる。地元の方からは近年クワガタムシを見なくなったと伺ったため、人為的な影響や自然災害による環境の変化によって、島内における種数に変動がないかも含め見ていくことにした。

現在、屋久島において、過去に多くの方が昆虫調査を行っており、高標高帯は2010年に標高約1640mに位置する高標高湿原の花之江河周辺で昆虫調査が行われている（高桑・藤田，2010）。その報告では、屋久島で未確認のルリクワガタ属 Genus *Platycerus*

及びツヤハダクワガタ属 Genus *Ceruchus* の探索が行われたが、確認には至らなかった。屋久島に生息するクワガタムシをまとめた資料は、鹿児島県昆虫同好会の久保田義氏が報告している（久保田，2009）。また、屋久島在住の昆虫愛好家の方より、「幼少期に屋久島でチビクワガタと思われる個体を見た」という情報を得た。

2009年から現在までの14年間で、屋久島のクワガタムシ科の新たな生息環境や生態、未確認のルリクワガタ属 Genus *Platycerus* とツヤハダクワガタ属 Genus *Ceruchus* 及びチビクワガタ *Figulus binodulus* Waterhouse, 1873 の探索をまとめ報告する。

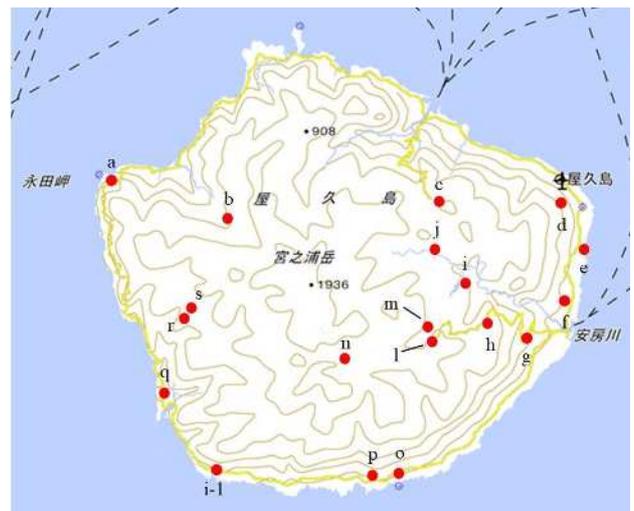


図2 採集地点地図（地理院地図から引用）

### 1 調査期間及び採集地点

調査期間：2018年4月1日～2023年3月31日

\* 〒891-4311 熊毛郡屋久島町安房 2739-343 屋久島環境文化財団屋久島環境文化研修センター  
（現 〒869-2225 熊本県阿蘇市黒川 1180 環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所）

## 屋久島植生垂直分布

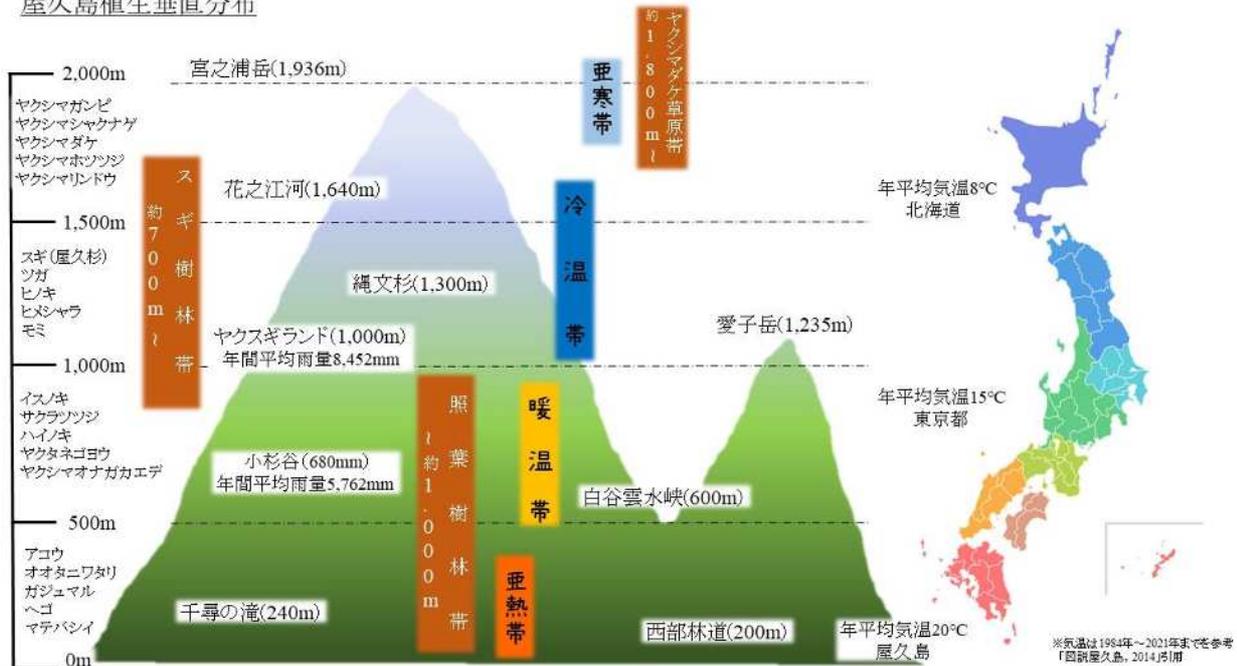


図1 屋久島植生垂直分布図

**調査地点** (図2) : a. 永田, b. 一湊林道, c. 白谷雲水峡, d. 長峰, e. 永久保, f. 安房, g. 春牧, h. 安房前岳, i. 荒川林道, j. 小杉谷, k. ヤクスギランド, l. 安房林道, m. 淀川歩道, n. 尾之間, o. 小島, p. 栗生, q. 大川林道, r. 花山歩道の9地点で行った。

## 2 調査者

渡邊卓実・中村 幹

公益財団法人屋久島環境文化財団屋久島環境文化研修センター

岩川 陽祐

公益財団法人屋久島環境文化財団屋久島環境文化村センター

渡邊映美里

屋久島町立栗生小学校

柳鶴涼子・柳鶴愛花・柳鶴優花・松永清楓

屋久島町立安房小学校

眞邊 利加子

屋久島町役場

## 3 調査概要

本調査で対象にしたクワガタムシ科は鞘翅目コガネムシ上科に分類され、科の学名にある Lucanidae は「森に住む虫」の意味があり英名は Stag beetle となる。「stag」は雄鹿、「beetle」は甲虫の意味を持つとされるように、♂は大顎有する。形態的特徴とし

て、腹節は5節で、触覚は10節からなり、第1節は基部から先端にかけ細長く、第2節から膝状に屈曲し、第8節から第10節は内側に片板状になる(藤田, 2018)。幼虫の中脚基部に発音器を有し、腹部末端には微毛が生えているのが特徴である。クワガタムシ類の幼虫はコガネムシ類の幼虫と似ているが、腹部末端が横に割れるコガネムシ類に対して、クワガタムシ類は縦に割れる。上記の特徴を有していることを判断し、棲息する環境と個体数に対するインパクトの軽減に配慮して採集及び調査を行った。

南北に長い日本列島には、13属46種55亜種の計101亜種が生息しているが、研究者によっては異なる場合がある(土屋, 2019)。屋久島は海岸付近から高標高帯まで広範囲に様々な種が棲息し、現在は亜種を含め9種のクワガタムシ類が確認され、その内固有種及び固有亜種は4種である(中田・渡邊, 2021)。本土に生息するクワガタムシ類の成虫は主に広葉樹の樹液を栄養源としている割合が多く、屋久島において、高標高帯は針葉樹を中心とした植生になっているため、モミやツガの樹液に集まる生態を持った種が確認できた。また、海岸林付近の材中で棲息することにより、流木として流れ、分布域を広げる生態をもつ種も島内で記録した。

本調査を行うにあたり、高桑正敏氏、藤田宏氏が2010年に報告した「屋久島高地帯花之江河における昆虫類調査」の内容にあったルリクワガタ属とツヤハダクワガタ属の探索を再度、本調査において採集

を試みた。双方の種の特徴としては、本土では高標高帯に自生するブナやミズナラの朽ちた材に♀は産卵するとされている。屋久島はブナの棲息はしておらず、標高が高くなるにつれて、針葉樹が多くなり、アセビやハイノキなどの広葉樹が優先的に生えている。ルリクワガタ属は産卵痕に特徴があり、倒木材の表面を観察するとマークが残っていることが多い。ツヤハダクワガタ属に関しては、褐色腐朽菌によって赤く朽ちた材（赤枯れ材）を好む生態をもっている。屋久島で見られる赤枯れ材のほとんどはアセビが朽ちたものである。双方の生態とフィールドサインの情報を基に探索を試みたが、該当する内容は見当たらなかった。また、チビクワガタと思われる個体がいたとされる林道で、採集を行ったが、こちらも同様の結果となった。

本調査の採集方法は、材割採集、ルッキング、ライトトラップ、バナナトラップ、スウィーピングを用いて行った。幼虫で採集した個体は、幼虫時期の形態の同定と成虫に変態するまで飼育して、二重に確認をとった。外見から雌雄判別がつかない種は、標本を作成する際、生殖器の形状から判断をした。

鹿児島県昆虫同好会の久保田義則氏の報告を基に、屋久島に既知で分布する亜種を含めた9種を調査及び採集し、以下に示したとおり得ることができた。

#### 4 調査結果

調査結果は以下のとおりである。和名、学名と種の配列は（荒谷，2022）を参考にし、屋久島を含む近年記録がある地域は藤田（2018）に従った。また、採集地点の名称は屋久島環境文化村ガイド図説（2014）を参考にした。雌雄（判別ができる個体）と各種の特徴は吉田（2015），藤田（2018），横川（2019），中田・渡邊（2021）を参考にし、幼虫の採集はLarve（L）で個体数を示した。採集した個体数を各種に示したが、1つの箇所（材や倒木下）から多数確認された場合は、得られた個体数を記録し、環境及び種の生態に負荷の少ない個体数を採集した後、残りの個体は、その調査地点で適切な環境を選びリリースをしている。

#### 鞘翅目

#### Coleoptera

#### クワガタムシ科

#### Family Lucanidae

#### マダラクワガタ属

#### Genus *Aesalus*

#### ヤクシママダラクワガタ

*Aesalus asiaticus sawaii* Fujita et Ichikawa, 1985 (図3-4)

**備考** 成虫の♂♀は非常に似ているが、大顎の有無で判別でき、♂には有り（図3）♀には無い。幼虫は8ミリ程度で成虫も5ミリ程度と小さく、体色は褐色をした斑模様で微毛を有し、好んで棲息する赤枯れの材に紛れて見つけることが難しい。原名亜種 *A. a. asiaticus* Lewis, 1883 に比べて、体表面の黒色鱗片は褐色味を弱く帯びて短く、前胸背板中央の一部のみが小さく束状になり、他の部分は斑状に生える（藤田，2018）。以上の特徴から本種と判断した。

標高約500mの広葉樹林帯で見られ、棲息する材には他のクワガタムシ類と同様に幼虫の食痕が残る（図4）ためそれを目印に採集をした。また、多数で1つの材に棲息することもあり、1つの材から成虫と幼虫を合わせて、20個体得られた。赤枯れしたマテバシイの落枝より採集しており、アセビの赤枯れ材から得られる（吉田，2015）こともあるが、本調査で確認はできなかった。白谷雲水峡で、赤枯れしたサルノコシカケ内からの採集記録（久保田，2009）もある。久保田（2009）の採取記録を基に大川林道を選定し採集を行った。以前の報告で大川林道内の採集地点は標高約500m付近だったが、大川林道終点（1,028m）でも本種を得ることができた。

#### 国内の既知分布 屋久島

【大川林道】6.XI.2019 L:6exs., 1.IV.2020 2ex. ♂  
♀ L:19exs.



図3 ヤクシママダラクワガタ *A.a.sawai* ♂



図4 マテバシイの赤枯れ材に幼虫の食痕

チビクワガタ属

Genus *Figulus*

マメクワガタ

*Figulus punctatus* Waterhouse, 1873 (図 5-6)

**備考** 国内において、小型種である本属と同じチビクワガタ *F. binodulus* Waterhouse, 1873 に形態は似るが、本種は上記の種に比べ体が小さく細長い(図 5)。大顎は先端で細くなり、眼縁突起は後方へ向け幅広く、前胸背板側縁の後方部が鋸歯状になることから区別できる(吉田, 2015)。成虫は♂♀の形体が似ているが、腹節第 2,3 節目に 1 列の微毛を有し、♀のみ腹節中央の微毛は不明瞭である(横川, 2019)。上記の雌雄判別はとても難しく、幼虫の時期に卵巣の有無で判別をする方法がわかりやすい。チビクワガタは内陸部まで分布をしているが、本種は沿岸部や離島などに棲息する(藤田, 2018)。また、ルイスツノヒョウタンクワガタ *Nigidius lewisi* Boileau, 1905 と同様で海流によって分布を広げたと考えられている。

島内で確認されるのは稀であり、海沿いに面した日当たりの良い林内の乾燥した環境にあるマテバシイの黒枯れした落枝より採集した。本種は材の中心部や樹皮下に棲息している(図 6)。採集する際は食痕の有無を確認後、慎重に探る必要があった。永田集落で採集した際、1 つの材から多数確認ができた。久保田(2009)は島の北西に位置する永田集落の民家が並ぶ環境に面した森から得られたようだが、本調査では得られなかった。永田集落の西部林道(世界自然遺産区域)よりの崖から採集できた。

**国内の既知分布** 本州(山口県下関市, 萩市, 三重県熊野市, 和歌山県日高郡みなべ町, 西牟婁郡), 沼島(兵庫県南あわじ市), 四国(高知県足摺岬, 布岬, 室戸岬) 鹿島(愛媛県南宇和郡愛南町), 二神島(愛

媛県松山市), 沖ノ島(高知県宿毛市), 九州(福岡県嘉麻市, 佐賀県唐津市, 宮崎県日南市, 鹿児島県指宿市, 肝属郡南大隅市), 白島(福岡県北九州市), 高島(佐賀県唐津市), 加部島(佐賀県唐津市), 大島(宮崎県日南市), 伊豆諸島(神津島, 三宅島, 御蔵島, 八丈島), 対馬, 五島列島(中通島), 平戸島, 男女群島, 天草諸島(下島), 鹿児島県三島村(竹島, 黒島), 大隅諸島(種子島, 馬毛島, 屋久島, 口永良部島), トカラ列島(口之島, 中之島, 平島, 臥蛇島, 悪石島), 奄美大島, 与路島, 徳之島, 沖縄本島, 伊平屋島, 石垣島

【永田】4.XII.2019 2exs. 2♀ L:12exs.

【一湊林道】24.III.2021 1ex.

【大川林道】20.V.2020 1ex. ♀



図5 マメクワガタ *Figulus punctatus* ♀



図6 成虫と幼虫が得られたマテバシイ材

ツノヒョウタンクワガタ属

Genus *Nigidius*

ルイスツノヒョウタンクワガタ

*Nigidius lewisi* Boileau, 1905 (図 7-8)

**備考** 体は黒色から褐色(未成熟個体は褐色)を帯び、光沢がある。♂♀共に大顎は発達し(図 7), 外見からの判別は難しいが♂の体は前胸背板側縁が♀の

個体より突出する（小型個体になると♂♀共に突出するため判断が難しい）。大型の個体は、大顎は二又に分かれていることが顕著であり、上方へ反る大顎が♂は太く長く、♀は細い（横川，2019）ことから判別でき、同定した。寿命は長く飼育下では2年3カ月の記録がある（藤田，2018）。

本種は材の中心部が朽ちて泥状になった箇所（図8）から幼虫とマテバシイの生木に止まっていた成虫を採集した。主な採取方法は材割となる。黒潮が運んだ流木内に潜んで屋久島にやってきた（中田・渡邊，2021）と考えられているため、西部林道に多く棲息するが、環境省及び林野庁の指定区内になり、採集は難しい。成虫は肉食性が強く、飼育下では魚肉ソーセージを与えていた。久保田（2009）は島の東側に位置する永久保集落の田代海岸で記録をしていたため、採集を試みましたが、本調査では得られなかった。

**国内の既知分布** 本州（和歌山県沿岸部）、四国、九州（南部）、対馬、種子島、黒島、屋久島、口永良部島、トカラ列島（口之島、中之島、臥蛇島、諏訪之瀬島、悪石島）、奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島、沖縄本島、慶良間諸島（渡嘉敷島、座間味島、阿嘉島、慶留間島）、伊平屋島、久米島

【春牧】26.VIII.2018 1ex. ♀

【大川林道】6.XI.2019 L:3exs. , 20.V.2020 4exs.  
2♂2♀



図7 ルイスツノヒョウタンクワガタ *Nigidius lewisi*



図8 中心部が朽ちて泥状になったマテバシイ材

### ネブトクワガタ属

#### Genus *Aegus*

#### ネブトクワガタ

*Aegus subnitidus subnitidus* Waterhouse,1873 (図9-10)

**備考** 本種は *A. l. laevicollis* Saunders,1854 を原名亜種として考えられていたが、♂の体は幅広く平たく、大顎は前方でより細くなり、前胸背板点刻は小さく点刻部は狭く、前胸背板の光沢は弱いことなどから、別種として扱われるようになった。日本では本種を含め、7 亜種が確認されている（藤田，2018）。♀がスジクワガタ *D. s. striatipennis* (Motschulsky, 1861)と似ているが、本種は大顎の内歯が大きく発達し、前胸背板前縁の突出が強くなることから上記の種と区別できる。♂の大型個体は大顎の内歯数が2対になり、小型個体は1対になる。

低地から標高 1,000m の高山帯と生息範囲は広いが、高地で見つかるのは稀である。幼虫はシロアリが摂食後に腐朽し、熟成した各種広葉樹及び針葉樹の赤枯れ材内に棲息する（図9）。土中からの報告もあり、発酵が進んでいる土壌環境を好む傾向にある。マツ類の赤枯れの材で採集記録もある（藤田，2018）が、本調査では得られなかった。♂は6月上旬から見られ、♀は7月中旬より出現する。昼夜問わずシイ類やカシ類、中にはモミやツガの樹液に集まる個体が見られた。特に高標高帯に棲息する本種は、登山道整備に伴う玉切りされた丸太材から染み出たモミの樹液（図10）に集まっていた。

**国内の既知分布** 本州、四国、九州、甌島列島、五島列島、佐渡島、種子島、屋久島、口永良部島、対馬、熊毛諸島（竹島、硫黄島、黒島）、伊豆諸島（大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島）、トカラ列島（口之島）

【一湊林道】 24.III.2021 1ex. 1♂

【白谷雲水峡】24.VII.2019 1ex. ♀, 2.VIII.2020 1ex. ♀, 7.VIII.2020 1ex. ♂

【長峰】1.VI.2020 1ex. ♂

【永久保】26.VII.2019 1ex. ♂

【荒川林道】14.VIII.2020 1ex. ♂



図9 幼虫が得られたスギの赤枯れ材



図10 モミの樹液で記録したネブトクワガタ  
*A.s.subnitidus* ♂

オニクワガタ属  
Genus *Prismognathus*

ヤクシマオニクワガタ

*Prismognathus tokui* Y. Kurosawa, 1975 (図11-12)

**備考** 屋久島固有種である本種は、オニクワガタ *P. a. angularis* Waterhouse, 1874 の屋久島亜種と記載される場合もあるが、♂の大顎は大きく湾曲し上反し先端は上下二又に分かれ、上方は大きく太く先端が鈍角になる(藤田, 2018)。これらの違いにより、本報告書では独立種として記録した。成虫の♂は全体艶がある黒茶色をし、♀はより光沢がある。

標高 1,000m 以上に分布すると記述されるが、本調査では標高は約 650m 以上から分布していることがわかった。広葉樹の倒木が多く見られ、日照のあ

まりかからない沢沿いの湿った環境を好み(図11)、9月上旬になると林内を低く飛ぶ本種が見られた。幼虫は各種広葉樹の倒木やスギやモミの朽木に棲息し、1年を通して涼しい場所を好む。特に水が染み出すほど、グチャグチャな泥状になった朽木に多かった。飼育下ではワインセラー等の低温飼育のできる環境設定をしない場合、1カ月もたらずに死ぬ個体が見られると共に、激しい温度の変化に非常に弱い。7月下旬の台風後、晴れ間が続く日から出現し、登山道沿いや遊歩道の手すり上を歩行する姿(図12)が見られる。成虫の寿命は短く、後食はほとんどせず、灯火やバナナトラップでの誘引は難しい。

国内の既知分布 屋久島

【白谷雲水峡】24.XII.2019 L:6exs., 28.V.2020 1ex. ♂, 29.VII.2020 1ex. ♂

【荒川林道】11.VII.2020 1ex. ♂, 5.VIII.2021 1ex. ♂, 12.VIII.2021 2exs. 2♂, 29.VIII.2021 2exs. ♂♀

【小杉谷】31.VII.2020 1ex. ♂

【ヤクスギランド】29.VIII.2017 2exs. ♂♀, 10.IX.2019 1ex. ♀

【安房林道】13.VI.2020 L:1ex. ♀

【淀川歩道】12.VIII.2019 1ex. ♂



図11 本種が得られた沢沿いの湿った環境



図12 手すり上を歩行するヤクシマオニクワガタ

*Prismognathus tokui* ♂

クワガタ属

Genus *Dorcus*

ヒラタクワガタ

*Dorcus titanus pilifer* Vollenhoven, 1861 (図 13-14)

**備考** 原名亜種はスラウエシ島北東部、ペレン島、バンガイ島、タリアブ島に棲息している。日本では本種を含め、12 亜種が確認されて、そのうち 11 亜種が離島の特産種となる。本種の特徴は、体が平たく光沢の弱い黒色だが、小型の個体は光沢が強く、♀の個体にも同様のことがいえる。九州南部に生息する離島の♂の大型個体は、大顎が若干緩く湾曲し、先端部に内歯を有し、他の内歯突起は消滅する(図 13)特徴がある(藤田, 2018)。上記の特徴から同定した。

本土で見られる内歯の発達した大顎の特徴を持つ個体も屋久島に棲息する。6 月下旬から 8 月中旬までスタジイやヤクシマサルスベリ樹液で採集ができ、灯火にも集まる。出現の時期が早い個体は主にスタジイに集まる。ヤクシマサルスベリやクヌギに集まる個体は小型のものが多く、樹の洞に隠れている(図 14)。地元の登山ガイドから「ヒラタクワガタを見なくなった」と伺った。たしかに島内において、採集した個体が年々少なくなっていた。

**国内の既知分布** 本州(山形県以南)、四国、九州、甌島列島、種子島、屋久島、馬毛島、口永良部島、熊毛諸島(竹島、硫黄島、黒島)、伊豆諸島(大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島)、隠岐諸島(島後)

【長峰】12.VI.2020 1ex. ♀, 17.VI.2020 1ex. ♂, 11.IX.2021 1ex. ♂

【春牧】2.VIII.2019 1ex. ♂, 10.VIII.2019 1ex. ♀, 10.VI.2020 1ex. ♂, 24.VI.2020 1ex. ♀, 27.VI.2020 1ex. ♂



図 13 内歯の消滅したヒラタクワガタ *D.t.pilifer* ♂



図 14 クヌギの洞に隠れる本種の小型個体♂

ヤクシマコクワガタ

*Dorcus rectus yakushimaensis* Tsuchiya, 2003 (図 15-16)

**備考** 原名亜種に比べ体が小さく幅広く、上翅が暗い赤褐色になる(図 15)。♂の大顎はやや太短く、全体表面の光沢は弱く艶消し状である。♀の前胸背板の艶はより光沢があり、赤褐色の体色が目立つ(藤田, 2018)。

灯火にも飛来するが、ヤクシマサルスベリや各種シイ類の樹液に集まることが多く見られた。田代海岸などの海岸林の乾燥し亜熱帯の植生帯から淀川登山口付近の標高約 1,400m の亜寒帯(図 16)まで、広い範囲に棲息を確認した。高標高帯から材割採集で本種の幼虫も得られている。

**国内の既知分布** 屋久島、種子島、馬毛島、甌島列島

【長峰】4.V.2020 1ex. ♀, 5.V.2020 1ex. ♂, 21.V.2020 3exs. 2♂ ♀, 30.V.2020 1ex. ♂, 19.V.2021 1ex. ♂

【永久保】20.XI.2021 1ex. ♀

【春牧】6.VIII.2019 1ex. ♂, 7.VIII.2019 1ex. ♀, 16.VIII.2019 2exs. ♂ ♀, 26.VI.2020 1ex. ♂, 26.VI.2021 1ex. ♂, 21.VII.2021 1ex. ♀, 23.VII.2022 1ex. ♀

【栗生】2.VII.2022 1ex. ♂

【花山歩道】24.IV.2021 L:1ex. ♀



図 15 赤味を帯びたヤクシマコクワガタ

*D.r. yakushimaensis* ♂



図 16 淀川登山口付近の幼虫が得られた材と本種の♂の死骸

#### ヤクシマスジクワガタ

*Dorcus striatipennis koyamai* Nakane, 1978 (図 17-18)

**備考** 原名亜種 *D. s. striatipennis* (Motschulsky, 1861) の屋久島固有亜種。原名亜種に比べ全体が褐色を帯び、♂は一对の内歯幅(板状部)が広がる(図 17)。本種の♂♀はヤクシマコクワガタ *D. r. yakushimaensis* Tsuchiya, 2003 に似るが、♂の大顎先端はより強く内側に湾曲し内歯の形状で区別でき、小型の個体でも内歯の発達をする。小型♂や♀は上翅に縦条溝が明瞭であり、全体的に細身になることから区別できる(吉田, 2015)。

高標高帯に棲息し、幼虫は各種広葉樹の沢沿いにある泥状の黒枯れ材(図 18)を好む傾向がある。樹幹部に芯のある朽木より見られることが多く、1つの材から得られる個体数は2個体程度と少なかった。本種は標高約 500m から約 1,650m まで見られるが生息環境はかなり限られていた。成虫は灯火やモミやユズリハの樹液等で見られるがルッキングでの確認は稀である。本種はヤクシマオニクワガタ *Prismognathus tokui* Y. Kurosawa, 1975 及びヤクシマ

コクワガタと混生していた。産卵する材も黒く泥状に朽ちて、同じ材より上記の2種が見られた。

**国内の既知分布** 屋久島

【白谷雲水峡】1.VI.2020 1ex. ♂, 7.VIII.2020 1ex. ♀, 29.VII.2022 1ex. ♂

【安房前岳】28.VI.2020 2ex. 2♂

【荒川林道】24.VI.2021 1ex. ♀

【小杉谷】24.VI.2020 1ex. ♂

【安房林道】19.VII.2020 1ex. ♀



図 17 ヤクシマスジクワガタ *D. s. koyamai* ♂



図 18 本種の成虫♀が得られた黒枯れした材

#### ノコギリクワガタ属

Genus *Prosopocoilus*

#### ヤクシマノコギリクワガタ

*Prosopocoilus inclinatus yakushimaensis* Adachi, 2014

(図 19-20)

**備考** 屋久島固有亜種の本種は、原名亜種に比べ光沢が強く、楕円形の体型で、赤褐色を帯び大顎の湾曲は強く、先端の小内歯の発達は弱くなる(中田・渡邊, 2021)。

5月下旬から小型の個体が出現し始めて、11月上旬頃まで記録した。ヤクシマサルスベリ、スダジイ、

クヌギの樹液に集まる。スダジイやクヌギより、ヤクシマサルスベリに集まる個体がほとんどである(図19)。大型個体が少なく、60mmを超える個体は稀である。灯火やライトトラップに良く集まってきた(図20)。

#### 国内の既知分布 屋久島

【安房】25.VII.2022 1ex.♀

【春牧】7.VII.2018 1ex.♀, 24.VII.2019 1ex.1♂, 8.VIII.2019 2exs.♂♀, 12.VIII.2019 1ex.1♂, 2.VII.2020 1ex.1♂, 27.VI.2021 1ex.♀, 28.VI.2021 1ex.♀, 30.VII.2021 1ex.1♂, 1.VIII.2021 1ex.1♂, 23.VIII.2021 1ex.1♂, 26.VIII.2021 1ex.1♂, 3.IX.2021 1ex.1♂, 10.IX.2021 1ex.1♂, 4.X.2021 1ex.1♂, 30.VI.2022 1ex.♀, 21.VII.2022 1ex.1♂

【小島】30.V.2021 1ex.1♂

【尾之間】13.VI.2022 1ex.♀



図19 ヤクシマサルスベリの樹液に集まったヤクシマノコギリクワガタ *P.i.yakushimaensis* ♂



図20 ライトトラップに誘引された本種の小型♂

#### 謝辞

本調査を行うにあたり、標本と情報の提供及び随時最新の情報を共有いただいた鹿児島昆虫同好会の

久保田義則氏には、大変お世話になったため、この場を借りて感謝申し上げます。

#### 参考・引用文献

<http://mushibu.na.coocan.jp/Specimen/ja/madarakuwagata.html> (2023年11月19日最終閲覧)

<http://mushibu.na.coocan.jp/Specimen/ja/ruisutunohyoutan.html> (2023年11月19日最終閲覧)

<http://mushibu.na.coocan.jp/Specimen/ja/mamekuwagata.html> (2023年11月19日最終閲覧)

<http://mushibu.na.coocan.jp/Specimen/ja/onikuwagata.html> (2023年11月19日最終閲覧)

<http://mushibu.na.coocan.jp/Specimen/ja/kokuwagata.html> (2023年11月19日最終閲覧)

<http://mushibu.na.coocan.jp/Specimen/ja/sujikuwagata.html> (2023年11月19日最終閲覧)

岡島秀治・山口 進(著)(1996) 検索入門クワガタムシ: 6, 168-169. 保育社, 大阪

久保田義則(2009) 屋久島のクワガタムシ鹿児島県昆虫同好会会誌 SATSUMA142号: 143-150.

黒澤良彦(1999) クワガタムシ科 上野俊一・佐藤正孝(編著) 原色日本甲虫図鑑II: 328-345. 保育社, 大阪

公益財団法人屋久島環境文化財団(2014) 屋久島環境文化村ガイド図説・屋久島: 4-5, 48-49. 学研教育出版, 東京

笹川幸治・井上重紀(2019) 福井県初記録の3種のオサムシ科 日本生物地理学会会報. 74: 80-83.

讃岐吉・渡邊卓実・大富 潤・駒井智幸(2019) 鹿児島県口永良部島から得られたネッタイテナガエビ *Macrobrachium placidulum* (十脚目: コエビ下目: テナガエビ科) の北限記録. 日本生物地理学会会報, 74: 100-106.

高桑正敏・藤田 宏(2010) 屋久島高地帯花之江河における昆虫類調査. 神奈川県立博物館研究報告, 39: 35-38.

土屋利行(著)(2019) 日本のクワガタムシ・ポケット図鑑: 1-31. むし社, 東京

地理院地図<https://maps.gsi.go.jp/#11/30.360730/130.469513/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k010u0t0z0r0s0m0f0>

中田隆昭(編)(2003) 屋久島の昆虫ガイド: 57-60. 財団法人屋久島環境文化財団, 鹿児島

中田隆昭(編著)(2013) 屋久島の昆虫ガイド: 57-60. 公益財団法人屋久島環境文化財団, 鹿児島

- 中田隆昭（著）・渡邊卓実（編）（2021）屋久島の昆虫ガイド第2改訂版. 公益財団法人屋久島環境文化財団, 鹿児島
- 福田晴夫（2007）第五章屋久島の昆虫. 屋久町郷土誌編さん委員会（編）, 屋久町郷土誌第四卷自然・歴史・民俗：136-163. 屋久町教育委員会, 鹿児島
- 福田晴夫・山下秋厚・福田輝彦・江原憲治・二町一成・大坪修一・中峯浩司・塚田 拓（著）（2020）増補改訂第2版昆虫の図鑑採集と標本の作り方：153-155. 南方新社, 鹿児島
- 藤田宏（著）（2018）月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ 6 世界のクワガタムシ大図鑑 図版編：Plate98-482(1,2,3,4), 131-648(8,9), 155-705(36,37,38), 174-778(12), 219-1081(36,37,38), 232-1213(1,2), 236-1292(1,2,3,4,5,6). 解説編：163-482, 214-648, 240-705, 264, 265-778, 349-1081, 387-1213, 404-1292. むし社, 東京
- 横川忠司（著）（2019）クワガタハンドブック増補改訂版：32-83. 文一総合出版, 東京
- 吉田賢治（著）（2015）フィールドガイド日本のクワガタムシ・カブトムシ観察図鑑：1-223. 誠文堂新光社, 東京
- 吉田 隆（2022）遺伝いきものライブラリ②クワガタムシの生物学若手研究者が大解説！クワガタの未知の世界 荒谷邦雄（著）クワガタムシ愛好が推進したクワガタムシ研究：46-59. 株式会社エヌ・ティー・エス, 東京
- 渡邊卓実（2020）鍬形虫（くわがたむし）～屋久島の勇ましき魅力～. 屋久島通信 VOL.75：4-5.